第６回　地域共生社会推進全国サミット in いこま

分科会 A

分科会 A

令和 6 年 10 月 12 日（土）09:30 ～ 11:00

たけまるホール　大ホール

未来を拓く子育て・教育

コーディネーター

同志社女子大学　名誉教授
上田（うえだ）　信行（のぶゆき）氏

パネリスト

生駒市教育委員会　教育長
原井（はらい）　葉子（ようこ）氏

株式会社アール・エヌ・シー
訪問看護ステーション RNC　管理責任者
小林（こばやし）　真理子（まりこ）氏

株式会社イツノマ　代表取締役 CEO
中川（なかがわ）　敬文（けいぶん）氏

アトリエ e.f.t.主宰
吉田田（よしだだ）　タカシ（たかし）氏

▽上田：

皆さん、おはようございます。

いかがですか、生駒の朝は。グッドモーニング。

今日、朝一番のシンポジウムということで、できるだけ皆さんとやり取りができるように進めていきたいと思いますので、皆さんのご協力をよろしくお願いいたします。

少し私のスライドを見ていただきたいのですが、坂本龍馬が昔、ここに立って向こうにアメリカがあるという土佐の桂浜でジャンプしています。

今日は「未来を拓く子育て・教育」というテーマをいただいておりますけど、コーディネーターとして最初に大きなテーマで少し皆さんと考えてみたいな、と思っています。最初のイントロダクションとして、英語ですけど、Unlock Your Potential（アンロック ユア ポテンシャル）という、あなたのポテンシャルというのは可能性のことです。ロックというのは鍵をかけるということで、アンというのは外すということです。

だから、皆さんはすごいポテンシャルがあるけども、自分の既成概念が、私はもうここまでとか、こういうことはできない、と思っています。

今日はテーマとして、どんどんこのコミュニティ、このムーブメントを広げて、つないでいき拡張していくという、キックオフのエネルギーになればと思って考えた私達のシンポジウムですので、ぜひこの Unlock Your Potential ということを、少し頭の片隅に置いていただいて、皆様のお話を聞いていただきたいと思います。

今日の４人のゲストはすごいですよ。

共通点としては、フィールドを作っておられる。つまり、自分の仕事場を自分で考えて作って運営して、さらにそれを拡張していこう。どんどん、どんどん、変化させていこう、ということで、まさに自分たちのポテンシャルに挑戦しておられる方なので、皆さんがこれからまちに帰られて、この何かエネルギーを生駒で少しチャージできた、と思って帰っていただくと、とても私達としてはこのシンポジウムのモーニングセッションの役割を果たせると思っています。

早速、紙を配っていますけど、皆さんペンを出していただいて、数字を書いていただきたいのです。皆さんのポテンシャルが、自分の中で 100%、私はこういうことは 100%ポテンシャルがあるけど、現在何%ぐらいポテンシャルを活用していますか。

つまり、発揮していますか。お仕事で、あるいは生活で。それを%で、例えば 70 とか 60 とか 30 とか大きく書いていただきたいです。皆さんに、掲げていただいて、こんな感じかなと。

ここでポイントがあります。数字は問題ありません。30 点が悪くて 90 点がいいというそういうことではなくて、Why です。何で 30%しか今発揮しないの？ なぜ 80%やれているの？と、そこを隣の方と少し話をしてもらうための数字です。よろしいでしょうか。

その数字は、今自分は 60 ぐらいかなと。なんで 60 なのかというのは自分の中にあって、書いていただいていると思いますので、それを横の方と数字を見せながら話をしていただきたいなと思います。はい、それでは書いていただけますか。

シンポジストの皆さんも数字を書いていただいて、私が「よ～いドン！」というと、見せていただきたいのですがどうですか、できましたか。できるだけ大きく、見えにくいですけどこちらから見ても大体こんな感じかなと分かるので、「せーの！」でパッと出すのが面白いところなので、大丈夫ですか、できるだけ大きく書いてください。大丈夫ですか。準備いいですか。シンポジストの方もよろしくお願いします。せーの！

うわー、すごい！78点とか。すいません、ちょっと小さくて見えません。30、30ですね。そちらいかがですか、30。他に、こちらの方は、すいません、少し見えにくいです。90ありましたね、60ありました。100%もあります。すごいです！いろいろな数字が出ていると思います。申し訳ありませんけど、隣に少しだけ移動していただいて、3人でも結構ですので見せ合って、話をしていただきたいと思います。皆さんも横で見せ合ってやっていただけますか。

Whyです。なぜ、その点数なのか。ぜひここでお願いします。

ありがとうございました。

▽上田：

代表して市長に聞いてみましょう。はい、この辺にご登場してください。

▽小紫：

皆さんありがとうございます。ちなみに100点ですと書いた人どなたかいますか。たくさんいらっしゃいますか。

僕も100点と書きたいのですが、78にしました。80点から2点引いたみたいな感じです。

市長という仕事が本当にありがたく、やりたいこと、自分のポテンシャルを引き出してくれる仕事だと思っていますけど一方で、まだまだ挑戦をしたいというところのポテンシャルが自分にはあるはずだと思って、ちょっと引いて78にさせていただきました。ありがとうございます。

▽上田：

シンポジストの方、まだお名前を紹介してないですけど、中川さん、どうでしょうか。何%ですか。

▽中川：

57%です。

▽上田：

Why、どうでしょうか。57%。

▽中川：

57歳ということもありますけど、53歳のときに、今日話す宮崎の都農町というところに東京から移住して、半分終わったから後半分。言っていいのか分かりませんけど、上田先生74歳ですよね。

▽上田：

実は、もう74歳に達します。

▽中川：

こんな74歳になりたいなと思って、まだ20年30年頑張りたいから今、過半数は超えたかなという意味です。ありがとうございます。

▽上田：

私も実はもう74歳になってしまったのですけど、いつの間にかなってしまった感じです。だから、90歳までは頑張りたいと思っているので、ポテンシャルをまだまだ上げていこうということです。

この数字というのは個人の数字になってくるので、学校教育でもそうですけど、60点で駄目だったとか、80点で良かった、ということではなく、なぜ80点で、あとの20点はどこが取れなかったかと子どもたちが考えていくと、試験というのは非常に意味があるわけです。

評価というのは、自分がこれから改善していくための情報を集めることなので、学校の点数はそういう意味であるわけです。ですから、30点ってもう恥ずかしいと言って、鞄なんかに直したらもったいないです。どうして、あと70頑張れなかっただろうかと考えることが大事です。数字そのものよりも、なぜその数字になった。Whyってことが、すごく大事です。

ここで今日のテーマにつながることですけど、その%を上げる、100%の方は150、200がありますから100で終わりではないです。

そう考えると、例えば市長さんが今78%ですよね。85にしようと思えば、あの人とこういうプロジェクトすると、もっとまちを面白くできる、この人と組めばどうだろうと思っているうちに78が90、95になってきます。たくさんの人、友達、

つまりつながりのネットワークがあればあるほど可能性は伸びます。

少し考えていただきたいのですが、誰とやったらどんなことができるかな、ということを同じメンバーで少しだけ話していただけますか。1分ぐらいで思い浮かべてください。具体的な方。あの人と組めば、どんな面白い事ができるだろう、ということを考えてください。

あの人と組めばこんなことができるのにとか、勇気がもらえるとか、例えば、自分のまちでカフェを開いてみたいとか。

自分はコーヒーを入れるのがものすごく上手だけど、お金の計算ができない。そうすると、自分でお金の勉強から始めると2年、3年かかっちゃうし、そういうことに興味ある友達を呼んでくると明日から出来ます。だから、私達の可能性というのは、自分1人きりではないです。すごく大事な事は、Weです、私達。

私達は割と、Iモード（私は、個人は）って感覚ではない。だけど、私達ってすごいよね、今回の実行委員会はそうですよね。

もちろん「私も」すごいですけど、「私たち」ってすごいよね、このwe-ness感覚というのは、堂々と私達はすごい！この中学校2年生、2組（Bクラス）、俺達ってすごい！という感覚がすごく大事だと思います。今言ったことを実践的にやってみようと思って、今朝、吉田田さんとこんなことをやってくれますかって、吉田田さんと話していましたけど。

まだご紹介もしてないけれど、申し訳ありません。どうぞ、吉田田さん出てきてください。

▽吉田田：

上田先生、今日、僕たち自由の話をすると思いますけど、もの凄く自由ですね。

▽上田：

実はドキドキしていますよ。

▽吉田田：

もう、後ろ大盛り上がりです。

▽上田：

今日も言っていましたが、何かフィナーレのようなオープニングができたらいいなと。

最悪、ここで何かが起こっても、皆さんには重要なメッセージを伝えているから、あとは気楽に出来るよね、という感じですね。

私が作った歌ですけど、「この歌をあなたに、愛の歌をあなたに」を一緒に歌っていただけると。

吉田田さんって言いにくいので、ダダさんでいいですか。ダダさんちょっと私が歌ってみます。

（上田）～歌♪～

▽上田：

ダダさん、すごいね。

▽吉田田：

もう最高ですね。これが生駒ですよ。

▽上田：

昨日も音楽のまち、生駒ってことで、昨日の交流会もすごかったですね。じゃあ、皆さんと一緒に歌う前に。

▽吉田田：

先生、いい声ですね。

▽上田：

ありがとうございます。というふうに、褒め合うといい気になってやりたくなる。

少し一緒に歌っていただけますか。皆さんとも、一緒に歌いたいけど「この歌をあなたに、愛の歌をあなたに」。ぜひこれをお持ち帰りいただいて、皆さんのまちで思い切り歌ってください。

（上田・吉田田）～歌♪～

▽上田・吉田田：

どうもありがとうございました。

▽上田：

今日のシンポジウムはこれで。アンコールをシンポジウムで、ということでよろしいでしょうか。どうもありがとうございました。

実はこれをやるのは勇気がいることです。僕はもう 74 年間生駒に住み続けていますけど、道が歩けなくなる可能性がある。

だけど、大事なことは思いついたらやってみる、ってことです。物事はやってみないとわかりません。ですから、やって見て分かる。

よく相談されます。「どうしようと思いますか？」、「やってみたら。」と言います。

このやってみたらって、やってみるということにブレーキをかけている。それがポテンシャルを、ロックしている一つの大きな要因だと思っています。だから、アンロックするためには、やってみる。やってみて最初からうまくいくわけがない。

ここが大事です。最初からうまくいかない。何回もプロトタイプを繰り返していくことで発見していくわけで、永遠に結果はないです。ですから、成果物じゃなくて、経過物です。そういうものの積み重ねだと思います。

今日 4 人のゲストの皆さんは、経過物を毎年毎年、毎日毎日アップデートされています。そういう姿勢というか、マインドセットといいますか、そういうアティチュードを皆さん持って帰っていただけると思います。

ご紹介いたします。一番向かって左側、原井葉子先生です。よろしくお願いします。生駒市の教育長をやっていただいております。ありがとうございます。

それから、小林真理子さんです。武蔵野から来てくださいまして、看護施設のステーション RNC、リージョナル ナーシングセンターをやっておられます。2013 年からだから 11 年です。これから詳しい話をしていただけると思います。楽しみにしてください。よろしくお願いします。

それから中川敬文さんです。宮崎から昨日飛行機で駆けつけてくださいまして、宮崎で面白いことをすごくやっておられて、すいません、なんていう会社の名前でしたか。

▽中川：

イツノマ。

▽上田：

イツノマ。いい名前だなと。

いつの間にそれができたのかとか、それから、ツノというのも秘密に隠された言葉です。そこのまちづくりカンパニーの社長をしておられます。中川敬文さんです。どうかよろしくお願いします。

吉田田さんは、今日ははるばる生駒から来てくださいまして、シンポジウムどんな感じにしようと。「僕、卓袱台持って行きましょうか」って、卓袱台で座ると雰囲気が変わるかなと言っていました。

アートスクールをもう 20 年以上もやっておられ、アトリエ的な学びの場。アトリエというのは、全ていろんな素材が準備されています。その空間に入ると周りにあるものを使って何かつくりたくなる、そういうような雰囲気がすごく大事です。生駒市全体がアトリエになって、ここに来ると、何でも素材があるから作って試せる、アトリエ的な生駒市。それを、彼はアートスクールを主宰なさって、もう 20 数年もやっている、吉田田タカシさんです。どうぞ今日はよろしくお願いいたします。

それでは、お 1 人 5 分間ずつぐらいで、皆さんの毎日の日々、起こっていることをご説明していただくとともに、なぜこれを始めたのかとか、どうしてこれが必要なのか、ということを、経験豊かで、毎日毎日が実験を重ねている方ですので、ぜひ楽しんで聞いていただきたいと思います。

まずは、教育長からお話ししますけど、第 3 次の教育大綱ができたところなのでそのお話も、今日はいろいろとしてくださると思います。どうかよろしくお願いいたします。

▽原井：

改めまして、おはようございます。

先ほどのポテンシャル、私は８ではなく無限大と書きました。まだまだできる！もっとできる！と思いながら日々教育に取り組んでいるところでございます。

今日は、居場所、それから出番という、この会のテーマに沿いながら、本市の教育の取組をお話させていただきたいと思います。よろしくお願いします。

本市はこの６月に、新しく第３次教育大綱を策定しました。入口にパンフレットを置かせていただいておりますが、皆さんお手元にございますか。もし、なければ QR コードからも読み取ることができますので、携帯等で見ていただけたらと思います。

たくさんの市民、子どもたち、保護者、関係者の声を集めて作った自負するものでございます。開けていただきましたら、生駒市の教育は変わりますということを宣言しております。

基本理念は、自分らしく「遊ぼう」「学ぼう」「生きよう」みんなで生駒を楽しもう。

特に、この生きるというところです。

遊び、学び、人や地域との関わりやつながりを通して、自らの居場所や役割を見つけ人生を「楽しむ」というところは、正に今回の大会のテーマになっているのではないかと思います。

つまり、子どもたちに自分らしく社会と関わっていく力を付けていきたいという思いでいます。

今回、三つの視点で実際の取組をお話します。

まず一つ目、子どもたちの居場所。これは内閣府から出されている資料ですが、35 人学級の中には様々な特性を持った子どもたちがいます。教育大綱の表紙の絵を見ていただきたいのですが、上の部分は、これまでの授業、前を向いて一斉授業、先生の授業を聞くというスタイルでした。

でも、これからは自分に合った方法で自分のペースで学ぶという授業スタイルに変換していきたいという思いを持っております。

下がその図です。壁を取り除いているわけではないですがイメージです。教室という壁を取り除いて、その中でときには子どもたちが前に出て先生になる。座って勉強する子も、自分の課題に友達と関わりながら課題を解決していく子もいる、授業スタイルを作っていきたいなという思いでいます。

また、自分で選び、自分に合った方法の中には、教室に限りません、学校の中には不登校傾向で教室になかなか入りづらい子もいます。教室で勉強しなくても、学校の中で別の部屋で居場所を作って、子どもたちの学びをサポートする。これはほとんどの学校で別室という形で作っていますが、今年度から中学校の２校で試行的に学びの居場所を作りました。環境を変え、専属の先生がついていただくことで、安心して通えるようになり、2 つの中学校では 10 人ぐらいの子どもたちが利用しています。

それから、学校だけが居場所ではないと、生駒市では学びの支援をできる場所を２ヶ所作っております。生駒駅前と、生駒南第二小学校で学校のワンフロアを使って、クッションを置いたり、個別に勉強が学べるスペースを作ったりしています。大体 40 人から 50 人が登録して、毎日 10 人ぐらいの子どもが通っています。

二つ目は、学校教育の中でどのように共生社会に対する教育をしていくのかということです。幼稚園、小学校、中学校で多様な体験学習、車いす体験や点字、アイマスク体験などを、福祉センターと協力をし、経験をすることでこういうことがあると、まず、知識として知ることから、自分で気づいたり考えたりして、じゃあ、自分がこういう場面だったらどういうことができるだろうか、自分が障害のある方たちのために何ができるだろうかと考え、行動できる力を付けていく。これ

は正に公教育だからこそできる機会、体験ではないかなと考えて進めているところです。

その一つが認知症サポーター養成講座です。昨日も認知症の話はいろんな場面で出ておりましたが、学校においても、小学校、中学校で地域包括支援センターの方に来ていただいてやっております。

ある学校で、認知症カフェのことを紹介したところ、興味を持つ子どもがいて、1 回行ってみたいということで実際にカフェに来てくれたという話を後日聞きました。こういう出会いを学校として作っていくということに学校教育の役割があるのではないかなと考えています。

それから、私が教員、校長を務めていた学校のすぐ隣に福祉作業所がありました。そこで、小学校を開放して地域や保育園、幼稚園から高校まで参加してもらってお祭りを開催しています。こういう交流や体験を通して自然に子どもたちが学べる機会もあります。

それから三つ目が、非常に本市が力を入れているところですが、令和 3 年から全ての学校に学校運営協議会、地域学校協働活動本部を設置しまして、地域の方に、学校の例えば通学の安全、それから行事、学習の支援などをしていただいております。

これは「えん・くろす」と言いまして、ちょっと写真がいくつか切れていますけど、手元の資料の中にもあると思います。

幼稚園 3 園で活動を始めておりまして、高齢者の方に入っていただいて、土作りや園庭で地域の方と園児が一緒にラジオ体操をする。また、園庭に地域の方が作られた野菜やいろんな手芸品などを持ってきていただいて朝市をする、そういう取組もやっております。

それから小学校、中学校にも老人会や気らくネットの方、たくさん入っていただいて作業をしていただくと共に、ある中学校では子どもたちが授業している隣で、空いている教室に地域の方に来ていただいていきいき百歳体操をしたり、サロンとしてここでお茶を飲んだり、また学校の手伝いをしていただいた後に集まって、憩いの場所として使っていただいているというような取組もしております。

最後にもう一度、教育大綱に戻りますが、三つ目の柱に、ダイバーシティ＆インクルージョンの推進をうたっております。

これからも、学校が、子どもたちにとってはもちろん、地域や保護者の方にとっての居場所、そして活躍の場、出番の場になるよう今後も進めていきたいと思っております。ありがとうございました。

▽上田：

原井さん、どうもありがとうございました。

これからどういう場を作っていくか、場をどう共有するかということがものすごく大きいと思います。ですから、学校が中心となってコミュニティを開いていくことによって人々が集まってくる場っていうことになってくると思います。

次の、小林さんのお話は、訪問看護ステーションをやっておられますけど、そこの場づくりで非常に共通点もたくさんあると思いますので、少し今のお話に重ね合わせて少しご紹介していただきますと、何か共通のイメージが出てくると思います。どうかよろしくお願いいたします。

▽小林：

訪問看護ステーション RNC の小林と申します。

本日はこのような機会をいただき、市民、生駒市のサミット運営の皆様に深くお礼申し上げます。

堅い話にしない方が、と言われたのですが、ちょっと緊張しているので原稿を読ませていただきます。

私は看護師で、訪問看護ステーションの管理者をしながら医療的ケア児のための施設運営を行っています。リージョナル・ナーシング・センターは先ほど紹介していただきましたが地域の看護相談所というのを英語で言うと、Regional Nursing Center と言うそうで、頭文字を取ってRNC という会社名にしています。

東京都の武蔵野市で 2013 年の 6 月から訪問看護ステーションを運営しております。武蔵野市についてお手元の資料に説明を入れ忘れたので少し説明させていただきます。

武蔵野市は人口約 15 万人、東京都のほぼ中央、多摩地域の東側に位置しています。市内を東西に貫通する JR 中央線に沿って、商業地域と住宅街が隣接していて、暮らしやすい都市機能が揃っています。新宿や渋谷などにも電車で 1 本という利便性があり、全国住みよいまちランキングなどで常に上位にランクインとインターネットでは紹介されています。高齢化率は 23%と全国平均の29%を下回っており、働く世代、子育て世代が多いと言えると思います。

今日お話させていただく「Workshop RNC」というのは 2022 年の 1 月に地域密着型通所介護を開設し、同年 8 月に共生型の施設として放課後等デイサービスを開設しております。RNC の共生事業の考え方はお手元の資料にある通りです。

ここで少し医療的ケア児について説明をさせていただきたいと思います。医療的ケア児とは、医学の進歩を背景として、NICU（新生児特定集中治療室）等に長期入院した後、引き続き人工呼吸器や胃瘻等を使用し、たんの吸引や、経管栄養などの医療的ケアが日常的に必要な児童のことを言います。全国に今、約 2 万人、在宅にいると言われています。令和 3 年の 6 月に交付された医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律というのが制定されて、その中でも医療的ケア児という言葉の定義が説明されております。うちの施設に通っている医療的ケア児ですけれども、気管切開のチューブが喉に入っていて、胃瘻があるけれども元気に走り回って普通の学校に通っているっていうような子どもたちを対象にしているというところで少し説明をさせていただきました。

弊社の事業構成になります。縦軸が訪問事業、通所事業、相談事業で、横軸が年齢となっており、訪問看護ステーションは全ての年齢において対応させていただいています。

通所事業が未就学児の児童発達支援、あと「Workshop RNC」というのが、6 歳から 18 歳までの放課後等デイサービスに通うお子さんたちと、40 歳以上の介護保険の認定を受けている高齢者の方、要介護認定を受けている方が対象になっております。これは、「Workshop RNC」の概要です。定員は 10 名の地域密着型通所介護 共生型放課後等デイサービスという施設類型になっております。

これが「Workshop RNC」のスタッフの資格になります。特徴はスタッフ全員が研修を受けて、医療的ケアを行う、体制をとっているということになるかと思います。有償ボランティアスタッフを有しており、館内の掃除とか、子どもの遊び相手などを行ってもらっています。こちらも資料の通りで、対象は要介護認定を受けた方、主にアルツハイマー型認知症の方などです。放課後等デイサービスの対象が、医療的ケア児、重症心身障害児、合理的な配慮が必要な児童などとなっており、医療的ケア児の医療的ケアの内容は、気管カニューレ挿入、胃瘻、ストマ、間歇導尿等となっています。

「Workshop RNC」の目的は、デイサービスに通う大人が次世代の子どもたちにできることを行い、それを子どもどもたちが受け取る場所を作る。社会参加、社会貢献、役割の創出。医療的ケア児の支援、多世代共生による広義の教育、放課後の居場所の提供、となっています。昨日からお話を伺っていて、キーワードが同じなのでここに呼ばれた理由はそうだろうな、と思いました。

「Workshop RNC」の内観になります。活動の

様子です。向かって左側の写真ですが、4 人の方が並んで、皆が同じ割烹着を着て、帽子をかぶって、手袋をして、作業しているので、見た目では誰が利用者で誰がスタッフなのか分からないですけど、手前の 3 人は利用者の方で、奥で油揚げているのがスタッフになります。調理手順って工程がたくさんあって、1 人では大変ですが、粉を付けるだけの係、卵を付けるだけの係、パン粉を付けるだけの係に分けて 4 人並んで作業することで調理活動に参加したことができる体制で行っています。調理がすごくベテランの方たちなので、私達が教えていただいているっていうような感じになります。立位が大変な場合は座位での作業等も一緒に行っております。

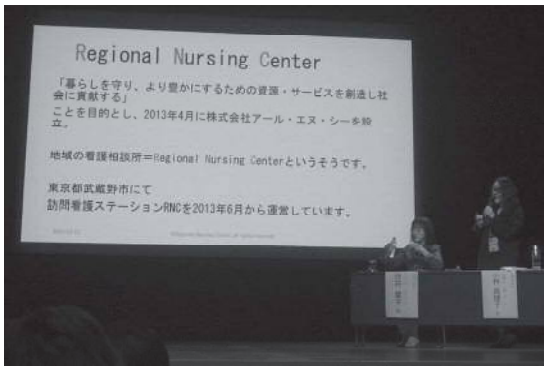
あと、午後の活動です。大人と子どもが一緒に過ごしていて、大人の方が得意なことを子どもに教えてくれるっていうようなことをしています。

これは水彩画教室になっています。ここでおやつを一緒に作ります。

気管切開をしているお子さんで、お口からの食事をしておらず、口からご飯を食べることはないですけれども、一緒に作業をするとすごく楽しそうに、調理の作業もしてくれています。ただ、食べたことがないからチョコレートとソースを混ぜちゃうみたいなこともありますが、いずれ食べられるようになったときに、甘いものと辛いものは、混ぜると美味しくないよ、みたいなことが伝わるといいのかなって思っています。あとはカードゲームを一緒にしたり、季節の行事を一緒にしたりして過ごしています。

これは書道教室の写真で、床に毛氈ってフエルトを引いて床で書道するスタイルの先生ですが、1 人、車椅子のお子さんが混ざっています。床に正座ができないので、寝そべったスタイルで書道をしているところに、他の子たちも一緒に集まってきて皆が腹ばいで書道している写真になります。

先生が「座らなきゃ駄目だよ。」って言いますが、「僕、座れないんだよ。」と言うと「あっ、そうか。」という、すごくそこの受け入れは素直に受け入れられている日々が繰り返されている施設になります。以上です。



▽上田：

ありがとうございました。やはり、多世代が何か一緒にやることが素晴らしいと思います。

高齢者の方だけ、あるいは子どもたちだけというのではなく、一緒にやることでお互い色々と学ぶことがたくさんあるし、色々と教えていただくこともたくさんあると思います。

一緒にコロッケとかを作ることもいいですね。自分の役割を自分で探して「自分はこれがやれるんだ！」。一つのコロッケという作品を作るのに自分がしっかり貢献している感覚が自然と育っていく。それから、寝転んで書道って何かいいかもしれないと思いました。

僕たちは、割とこうあるべきだ、ということにかなりがんじがらめになっているかもしれないですけど、状況に応じて自然に、自由に、何か描けるという機会をどう与えるか、ということはすごく大事だと思います。

次は、中川さんですけれども、イツノマというとてもユニークなまちづくりカンパニーをやっておられまして、皆さんが聞かれたことがあるいろいろな施設、あれもそうですか、これもそうですか、という話が出てくると思います。中川敬文さん、どうぞよろしくお願いします。

▽中川：

よろしくお願いします。

ちょっと、こちらですね、「イツノマ」って見え

ますか。これがロゴなんですけど、いつの間にやったのっていうダジャレと、今の時代の真ん中に都農を、ということでつけさせていただきました。

▽上田：

宮崎県の都農町のことですよね。

▽中川：

都農町っていうところにあります。

今って、何かっていうと地域共生社会とか、都農の場合でいくと過疎地なんですが、今の社会課題の真ん中に都農があるから、そこでまちづくりを頑張ろうということで、特に人から始まるまちづくりということをメインにやらせていただきました。

その前まではずっと東京でですね、キッザニアって皆さん聞いたことある方いらっしゃいますか。ご高齢の方が多い割にはご存知で嬉しいです。

15歳までしか入れないですけど、子どもの職業体験施設をテーマパークにしました。あと、オランダのイエナプランスクールを日本に持ってきて大日向小学校とか、上田先生とも接点がある下北カレッジっていうね、こういうものを作らせていただいておりました。

都農町というのは、宮崎県の真ん中にあります。宮崎県行ったことある方いらっしゃいますか。結構いらっしゃいますね。ちなみに都農町って聞いたことある方？よくご存じで、吉村先生の関係で。

宮崎市から1時間ぐらいの過疎地でございまして、宮崎県の都農町は総合診療医の方に寄附講座を出して宮崎大学医学部から6人、まちに総合診療医が来て医師不足の解消を、かかりつけを通してやっています。僕もそこの仕事を結構させてもらっていますが、本日はちょっとお子様、子育て中心ということで割愛します。

今、私はまちづくりと教育を重ね合わせた仕事をしています。

これ僕の自宅ですけど、自宅兼ホステルを通常でも経営しておりますので皆さん、今日の話聞いてちょっと面白いと思ったら、ぜひ視察にお越しいただければ、私の自宅にホステルとしてお泊りもいただけますのでぜひご予約もお待ちしております。

これ何だか分かりますか。僕が都農町でまちづくりをしている、Whyになります。

今年の3月に卒業した小学校6年生が89人。1万人のまちですので、そんなもんですよね。出生数が7、80人。

10年後、20年後に一体何人が都農町に住んで働くのかが、僕のWhyです。今28歳の学年は110人いますが、目視確認できる限り都農に働いている人は5人しかいません。

これで、過疎地域に未来はあるのかっていうところで僕が出来ることとしては、いざUターンしたいと思っていても仕事がない。あるいは、まちがつまらない、イオンがないみたいな、そういったことでUターンできないとしたらそれは勿体ないんじゃないかと。

居住職業選択の自由があるので、どこ住んでもいいですけど、帰りたいと思ったときに帰れないのはよくないんじゃないか。

だったら、自分で仕事を作れるようになればいいんじゃないか。あるいは、自分でまちを面白く変えればいいんじゃないかということで、僕は中学校に入ってキャリア教育とか起業家教育を今、しています。

4つの活動をしていますが、今日はこの1個目の都農未来学という総合学習を中心にご案内させていただきたいと思います。

生駒市にいると、都農っていうまちの規模が分かりにくいかもしれないけど年間出生数が80人ぐらい、高校は廃校になっています。中学校が1校だけ全校生徒238人、小学校が3校、そんな規模です。

その中で、僕は小中学校の総合学習を全て担当して4年目になりまして、中学校で年間24時間やっています。

どうやっているかというと、自分がプロとしてやっているまちづくりを探求のカリキュラムに落とし込んで、中学生たちに考えてもらって、それをまちにフィードバックするという循環をしています。

何がやりたいかっていうと、ここに写真があるんですけど、いいこと思いついちゃった！って子を増やしたい。あるいは、いいこと思いついちゃった！って発言をたくさん引き出して、この指止